

# poco a poco

パラグアイ便り 2023/07/03 Número5

2022年度 青年海外協力隊

氏名：吉田 花純

職種：小学校教育

## 【パラグアイで誕生日を迎えました】

パラグアイで26歳の誕生日を迎えました。誕生日が祝日と重なっており休校であったため、可愛い子どもたちには会えず、一人で過ごすことになるのかなあと感じていました。しかし、前日には同僚の先生たちが集まってパーティーを開いてくれて、当日にはいつも私の面倒を見てくれる家族にお祝いを兼ねたアサード（パラグアイの伝統的なBBQのようなもの）に招待してもらい、とても幸せな時間を過ごすことができました。誕生日は家族と過ごすことが一般的であるパラグアイで、日本の家族や友人と離れて暮らす日本人である私のことを「我こそがKasumiの家族！」と言わんばかりに、大勢の人がお祝いしてくれました。温かい人たちに囲まれて生活できていることを改めて感じました。自分にできることは本当にちっぽけなことかもしれませんが、少しずつ恩返しをしていけたらと思います。



スペイン語とグアラニー語で誕生日の歌を歌ってもらいました。  
日本語でも歌ってほしいと頼まれましたが、  
日本では英語を使って歌うことを伝えると、大変驚いていました。



誕生日だけでなく、首都で行われたミュージックフェスティバルに参加し、ダンスを楽しみました。  
一切の恥を捨てて一緒にダンスを楽しむと、心の距離がグッと縮まります。



## 【いらいら・もやもや・・・そんなときこそ忘れたくないこと】

パラグアイのバスには、様々な商売人たちがお菓子や飲み物、靴下やアクセサリーなどを売るために乗車してきます。大きな声で商品名と値段を早口言葉や歌のように繰り返し、盛大にアピールをします。時には、巨大スピーカーやギターを担いで、一方的にラップやオリジナルソングを爆音で披露し、チップを求めるアーティストも乗車してきます。突然大声で政治や宗教に関する演説を始める人もいます。また、私自身が外国人ということに加え、非常に社交的な方が多いパラグアイ人の国民性により、老若男女問わず高確率で話しかけられます。初めて会う人ばかりのはずなのに、長距離移動でも決して退屈しないほど、バスの中ではいろいろなことが起こります。

大きく分けると3種類のバスがあり、(市内近郊バス、中距離バス、長距離バス)乗る仕組みや内装が大きく異なります。とても面白い違いがあるので、別の号で詳しくご紹介できたらと思います。



これはある日、そんな賑やかなバスに乗っていたときのことで。私に、突然あるパラグアイ人女性が棒付きキャンディを投げつけ、走り去って行きました。呆気にとられ一瞬で状況を正しく理解することはできませんでしたが、おそらくプレゼントではないことは経験的に想像がつかしました。開封せずにしばらく待っていると、例の女性が戻ってきました。無言でこちらをじっと見つめながらお金をくれといった調子で手を差し出してきたので、「買いません。」と言ってキャンディを返そうとしました。すると、私の手からキャンディを奪い取るようにしてその場から立ち去って行きました。売り方と言い、態度と言い、無礼な態度として私の目に映り、もやとした感情が残りました。

また残念ながら、干していた洗濯物が盗られたり、同僚のスマートフォンや家族の通帳が盗まれたりするなど、そういった犯罪に遭遇することは珍しくありません。南米の中では、比較的治安が良いと言われているパラグアイですが、射殺事件など恐ろしい事件は現に起きており、少し慣れてきたからと言って用心を怠ってはなりません。他にも、飲食物のゴミなどを、学校や道路、他人の家であっても、ポイ捨てをする習慣(パラグアイにはゴミをゴミ箱に捨てない悪い習慣があるとパラグアイの人たちが笑いながら話していました。)が根付いてしまっていることなど、どうしても好きになれない生活習慣や文化はあります。

だから私は時々、“そこだけはどうしても受け入れられない！受け入れたくない！”と思うことがあります。いろんな面において、あまりにも生活や文化、価値観や感覚が違いすぎて、言語の壁以上に分かり合えるものか！なんて、泣き言を言いたくなる日もあります。

ただ、そういったもやもやとした感情が激しく沸き起こった次の日に限って、パラグアイの人の何気ない優しさや温かさに救われる出来事が起こるのです。「一瞬でも、嫌だなんて思っごめんね。」と、謝りたくなるようなそんな素敵な出来事が。

海外で、ましてや生活水準がまるで違う国で生活を、仕事として活動するという事は、良い面だけを知ることができる旅行とは異なり、負の面とも向き合わなくてはならないときが必ず訪れます。そんなとき私は「好きになれなくても、平気になれ。」という言葉思い出します。

揺るぎない自分の芯を保ちつつ、現地の方々と歩み寄って生活・活動する。これを“努力”とするならば、いつも助けてくれている家族や友人、同僚たちも同じように、私を、そして私を通して日本を、知る“努力”をしてくれていると言えます。常に心穏やかに過ごしたいものですが、そうはいかないことは頻繁に起こります。ただ、どんなときでも感謝の気持ちを忘れないことは、相手との良い関係を構築するだけでなく、自分の気持ちを軽くする手助けもしてくれる気がするのです。“ありがとう”という言葉、これからもたくさん届けていこうと思います。

## 【ひとこと】

先日パラグアイで活動する海外協力隊の全隊員とお会いする機会がありました。職種も年齢も活動場所も全員ばらばらです。普段はそれぞれの任地で、各々たった一人で頑張っている頼もしい仲間たちです。初めて会ったとは思えないほど会話は弾み、徐々に日本語で話せる喜びを噛みしめながら、会話を楽しみました。日本で何気なく生活をしていたら、きっとお会いすることはなかったであろう素晴らしい経験をお持ちの方がたくさんいらっしゃいました。経験値や専門性はそれぞれまるで違いますが、どの方も自分のぶれない芯をお持ちで、ストイック且つエネルギッシュであるという共通点を感じました。

そんな素敵な方々との会話の中で、自分には誇れる経験などありませんが、それでも“私は私のままで良いんだ！”と思わせてもらうことができました。ますますマイペースに、呑気に、軽やかに、したたかに、前向きに活動していけたらと思います。